

AASPN educational course 2026 に参加して

あいち小児保健医療総合センター脳神経外科
苗代 朋樹

この度 2026 年 5 月 7 日から 10 日にフィリピン・マニラにおいて開催されました「AASPN educational course」に参加させていただきましたので、ご報告させていただきます。この educational course は 3 年周期で開催されており、Core course として「腫瘍・てんかん」がメインとなるコースと、「先天奇形・水頭症・外傷」がメインとなるコースがあります。今回のコースは前者であり、腫瘍・てんかんが中心でしたが、痙縮治療についてのセッションも組み込まれていました。

コースは計 4 日間あり、Day 2 の午前にはマニラの旧城壁都市 Intramuros の walking tour がありました。5 月のマニラは気温が 35～40 度くらいととても暑く、楽しくもありましたが全日程のなかで体力的に一番辛い時間でした (Figure 1)。午後には、フィリピン大学総合病院にてケースディスカッションと選択的後根切断術 (SDR) についてのカダバートレーニングが行われました (Figure 2)。私自身、SDR を 3 年ほど前から始めており、エキスパートから直接指導を受けることができたこの機会は大変貴重なものでした。

Day 1 および Day 3、4 は、宿泊地でもある Rizal Park Hotel で各分野のエキスパートからの講義とディスカッションがありました。自施設で痙縮治療に取り組んでいる私にとって、痙縮セッションでは新しい知見が数多くあり、大変勉強になりました。特に印象的であったのは、SDR におけるアプローチの変遷と多様性です。最小の椎弓切開にて円錐部で後根切断を行う方法には大変驚かされると同時に、自身の不勉強さを痛感いたしました。私自身は先天奇形、外傷、水頭症を特に専門として取り組んでいるため、もう一つの Core course にも是非参加してみたいと強く思いました。

本コースには日本から、インストラクターとして北里大学の師田先生と国際医療福祉大学の下地先生、受講者として松戸市立総合医療センターの田村先生、千葉県こども病院の田井先生、東京女子医科大学の仲村先生が参加されていました。日本の諸先生方と知り合えたことも、このコースに参加して良かったことの一つです。また、医療経済的な観点からシャントバルブは定圧バルブが第一選択であることや、小児神経外科医が国内に数名しかいないことなどアジアオーストラリア諸国での小児神経外科の実情を伺い知ることができ、国内のみならず国外へ目を向ける良ききっかけとなりました。

フィリピンを訪れるのは初めてでしたが、食事は私には割と合いました。特にカダバーコースの合間に食べた「Jollibee」というフライドチキンは大変美味しかったです。フィリピンにおけるファストフード兼ソウルフードのような位置づけのようで、現地の食文化を肌で感じる良き体験となりました。夜には各国の参加者との懇親の機会もあり、現地のレッドホースというビールを片手に交流を深めることができました。

今回の educational course は大変実りの多いものでした。参加を呼びかけてくださった師田先生、そして参加の機会を与えてくださり、快く送り出してくれた当科の加藤部長、栗本先生にはこの場を借りて深く感謝申し上げます。

実は、私は飛行機が大の苦手で、これまで海外などの遠出は出来ることなら避けていました。しかし、今回の教育コースへの参加を通じて中時間のフライトには耐性が少しできた気がしています。私のように海外への一步を踏み出すことに（様々な）ハードルを感じている先生もいらっしゃるかもしれませんが、現地で得られる知識や経験、そして国内外の先生方との繋がりは何物にも代えがたいものかと思います。少しでも興味を持たれた先生方がいらっしゃいましたら、ぜひ次の機会に参加されることをお勧めいたします。



Figure 1



Figure 2